

去る八月二十三日午前、本校第二十一代校長上宮厚慧先生が八十一年の人生を閉じられました。先生を偲びつつ、改めて大谷の教育を考えてみたいと思います。

先生は大正十五年新潟県糸魚川市の真宗大谷派末寺のお生まれで、大谷大学を卒業された後、本校へ奉職され、以来、平成四年三月に退職されるまで、十二年間の校長を含め、実に四十年間にわたって大谷の教師をつとめられました。その後も、日本高等学校野球連盟の副会長として、また京都市の同和問題の解決に力を尽くされました。

先生のご生涯はあらゆる方面の教師でありましたが、その根本をなしたのは、人間の成長や教育に欠かせない宗教心の涵養でありましょう。生徒指導においても、スポーツの鍛錬においても、学校運営においても、宗教、とりわけ親鸞聖人が開いてくださった浄土真宗の教えがベースとなっていました。それは、大きな願いやはたらきに安心した上で自己を鋭く見詰め、誠を尽くしていく姿勢と言えるでしょう。

仏教に「開示悟入」の言葉がありますが、今般改めて上宮先生の教え方といえますかご指導が、その実践であったと気づかせていただきました。先生は、誰に対してもきわめて気さくに接しておられました。肩の力を抜いて、庶民的な雑談で場を寛がせ、まずご自身を開かれることで相手の頑な心を開かせていかれます。そうして、素直な気持ちで受け入れやすい状態で、大切なことを教え示されます。わかりやすい言葉で、巧みな比喻も織り交ぜて、言われた方が自分の生活実感に重ね合わせられるお話をされますので、聞いた者が自ずから気づくようになります。そうなれば、その教えられたことは深くはらに入ります。忘れられないと言うよりも、何かの機会に言葉が蘇ってくるといえますか、単なる知識の記憶にとどまらない自分のものになってしまいうです。ですから、叱られ指導を受けた生徒たちが、先生を慕い卒業後もさまざまに交流を続けていつています。

教育というと、教えるものが教わるものに知識や技能を伝達するようなイメージがありますが、大事なことは、持っている知識をもとに生徒自身がよく考え、自ら気づいていくことで、教師はそのように導くことが肝要です。そうして、学んだことがきちんと自分のものとなり、次の学びへとつながり、そうしながら全人格的な成長を遂げていくよう、「開き、示し、悟らせ、腹に入れる」教育が求められます。

今の自分があるのは、さまざまの「おかげさま」によるのであると、生かされてある自己を喜び、まわりに感謝していくことが「真理を尊重せよ」の実践であり、それに応えて他者のためにできることを尽くすのが「義務を果遂せよ」の実践であるなど、何かにつけて、第九代校長谷内正順先生の制定された「校訓」を引き合いに出されて、具体的に話されることが多くあり、それらは教えを受けた者の心に、その優しい笑顔と共にいつまでも残っていききました。

人間を一面的な物差しでのみ判断するのではなく、生徒自身が気づいていない素晴らしい人間性や資質を掘り起こして、一人ひとりを大切に丁寧に、心に点火して行かれたと思います。先生に火を灯してもらった一人として、その火を次から次へと継いでいく責任と使命が、大谷で教育に携わる者として、先日の教職員による追弔法要において、心を新たにしました次第です。

今もなお、上宮先生から励まされ慰められながら歩んでいきたいものです。